いわゆるガ・ノ可変と提示機能

On the So-called GA-NO Conversion and the Presentative Function

三　原　健　一*
MIHARA Ken-ichi

1. はじめに

「ガ・ノ可変（GA-NO Conversion）」とは，最も典型的には，（1a-c）のように，［　　］で示す連体修飾節（名詞修飾節）において，主語の「が」格が随意的に「の」格と交替する現象を指す。（1a）は関係節，（1b,c）は同格節であるが，（1c）のように「こと」（や「の」）といった形式名詞の場合でもガ・ノ可変が可能である。[1]

（1）a.［村上春樹　｛が / の｝　書いた］エッセイ（はファンが多い）
　　b.［厳しい冬　｛が / の｝　やって来る］予感（がする）
　　c.［彼の態度　｛が / の｝　不自然な］こと（に気付いた）

ガ・ノ可変に準じる言語現象は，日本語以外の言語でも報告されている。例えば，南アメリカの先住民言語の一つである Cuzco Quechua や，オーストロネシア諸語の一つである Chamorro でも，関係節内の主語が随意的に属格で標示される。また，類似する現象は，Ewe, Yaqui, Mongolian, Dagur, Turkish などの言語でも見られる（詳しくは Hiraiwa 2001 参照）。従って，汎言語的には，ガ・ノ可変ではなく，主格・属格交替（Nominative-Genitive Conversion）と呼ぶ方が妥当なのだが，本稿では，日本語に特化して論じる関係上，伝統的なガ・ノ可変という名称を用いることにする。

ガ・ノ可変が関わる構文では，①「の」で標示される主語（以下，「の」主語）と述語の間に介在する要素の問題，②「が」で標示される主語（以下，「が」主語）と「の」主語の作用域の違い，③「が」主語と「の」主語の句構造中での位置といった問題が研究者の関心を集めてきた。本稿では第一に，「が / の」主語の後に置かれる休止（ポーズ）の有無がこの構文の統語的振る舞いを支配するという，先行研究で全く見過ごされている新たな事実を指摘する。第二に，この指摘が正しければ，上記①②③の分析は根幹から刷新されなければならないことを論じる。第三に，本稿が指摘する休止の問題は，日本語の様々な構文において姿を現す，「提示機能」にその根源があることを述べる。そして最後に，本稿が指摘する事実が正鵠を射ていると

---

*　京都ノートルダム女子大学・客員教授

[1]　最終稿を作成するにあたって，2名の査読者からいただいた詳細なコメントが非常に有益であった。ここに記して謝意を表したい。

すれば，ガ・ノ可変という現象は，実は存在しないかもしれないことを示唆する。

2. 介在効果と休止

ガ・ノ可変については，古くは三上（1953）に指摘があるが，研究が本格的に開始されるのは Harada（1971）以降である（この論考は福井（編）2000 に再録されている）。さて, Harada（1971）の主たる関心は，ガ・ノ可変が適用された文（2）に関して，（3a,b）で示す二通りの文法性判断（原田は 'idiolectal variation' と呼んでいる）があり，これを理論的にどのように説明するかにあったと言える。

（2） 私はニクソンの嘘をついていることを悟った。（福井（編）2000: 78）

（3）a. 話者 A：「の」主語と述語の間に一つの要素の介在なら許す。

b. 話者 B：「の」主語と述語の間に要素の介在をまったく許さない。

「の」主語「ニクソンの」と述語「ついている」の間に「嘘を」が介在する（2）の場合，話者 A は容認し，話者 B は容認しない。これが，ガ・ノ可変における介在効果の最初の指摘である。

しかし，ガ・ノ可変に関する議論は，Harada（1971）以降，現在においてもそうなのだが，「の」の後に休止があるか否かが全く考慮されていない。例えば,「の」と述語の間に二つの要素「みんなで」「勢いよく」が介在するので，話者 A にとっても非文になるとして挙げられている（4a）の例も,（4b）のように「子供たち」の後に休止を置けば（以下「, 」で示す), 筆者には完全に文法的になる。

（4）a. * 子供たちのみんなで勢いよく駆け上がった階段（福井（編）2000: 80）

b. 子供たちの，みんなで勢いよく駆け上がった階段（の向こうに海が広がっていた）

以下，この休止の問題が，ガ・ノ可変に重大な影響を及ぼすことを見ることにしよう。

3. 作用域解釈

その後のガ・ノ可変研究において，今日に至るまで影響力の強い仮説として，Miyagawa（1993）・Ochi（2001）による「名詞認可仮説」がある。名詞認可仮説とは，NP 主要部の N が「の」主語を認可するというものである。Miyagawa（1993）は,（5）のように,「が」主語は S の主語位置に,「の」主語はそれより上位の NP 領域にあるとする（（5）では名詞句部分のみ示してある。以下，例文番号付きの文例提示では,「が」主語を「ガ主語」,「の」主語を「ノ主語」と略記する)。

（5） … [$_{NP}$ ノ主語 [$_{S}$ ガ主語 …] N] …

Miyagawa（1993）は作用域解釈の観察から（5）の結論を導いているのだが,「ジョンかメアリ｛が / の｝来た可能性」という宮川が用いている例より，越智（2016）の例の方が分かり易いと思われるので，文例は越智の文献から借用することにしたい（下記の○ / ×の判断も越智

による)。[2]

今, 5 枚のコインをトスするという状況を考える。○は妥当な解釈としてあり得ることを, ×はあり得ないことを示す。

(6) a. すべてのコインが表になる可能性は 50% だ。　×
b. すべてのコインが表になる可能性はおよそ 3% だ。　○
c. すべてのコインの表になる可能性は 50% だ。　○
d. すべてのコインの表になる可能性はおよそ 3% だ。　○
(越智 2016: 156, 一部改変)

一回のトスで 5 枚のコインが全部表になる可能性は約 3% なので, (6b) は妥当であるが, (6a) は適正な%を述べていないので妥当な文ではない。ところが,「の」主語を持つ (6c,d) では双方が妥当だと越智は言う。(6c,d) の解釈についてはすぐ後で再度取り上げるが, しばし越智の主張を辿ってみたい。

越智は,「が」主語が「可能性 (a possibility)」より狭い作用域解釈しか取らないのに対して,「の」主語は,「可能性」より広い作用域解釈を取る場合 (すべてのコイン＞可能性→可能性＝50% 解釈) と, 狭い作用域を取る解釈 (可能性＞すべてのコイン→可能性＝ 3% 解釈) の双方があり得るとしている。可能性＝ 50% 解釈は, 5 枚のコインの「それぞれ」が表になる場合であり, 可能性＝ 3% 解釈は, 5 枚のコインが「一斉に」全部表になる場合である。

二つの主語の位置関係を示した (7) を見られたい。

(7) … [$_{NP}$ ノ主語 [$_{S}$ ガ主語 [$_{VP}$ {ノ主語 / ガ主語} …]][$_{N}$ 可能性]]

宮川は, いわゆる動詞句内主語仮説を採り,「が」主語・「の」主語とも, 派生の始発段階では VP 内にあるとする。そして,「が」主語は S の主語位置に,「の」主語は NP 領域に移動するという訳である。そうすると,「が」主語は, 移動の前後において「可能性」より狭い作用域しか取らないが (「可能性」は S より上位にある NP の主要部 N なので, 常に「が」主語より上の位置を占める),「の」主語は, 移動前には「可能性」より狭い作用域を取るのに対して, 移動後には「可能性」より広い作用域を取る。この観察から, 宮川は (5) の結論を導いた訳である。

さて, 宮川による作用域解釈の問題を検討し直してみたい。(6c,d) の「の」主語の場合については, 筆者も「の」主語が広い作用域と狭い作用域の双方を取るという判断に同意する。ただし, (6c) では,「すべてのコインの」の後に休止が必要である。しかしながら,「が」主語の場合でも,「すべてのコインが」の後に休止を置けば, 筆者には (6a) も妥当な解釈となる。(8)

---

[2] 宮川は, 名詞句の DP 分析を採用しているので, 実際には, DP 主要部の D が「の」主語を認可するのだが, 本稿での分析には直接的な影響を与えないので, 簡略化して示す。また, 宮川は, Nakai (1980) が指摘した「昨日, 雨の降っていたとき」のような例から,「の」主語は論理形式 (LF) で S 内から NP (DP) 領域に移動するとしている。「雨の」の前に「昨日」が生起しているので, 語順からして, 顕在的に移動しているとは考えられないからである。S 内からの移動については, 本論の (7) を見られたい。

を見られたい。

（8）すべてのコインが，表になる可能性は 50% です。（コインには表と裏しかないので当然のことです。）

他方，（6b）については，筆者の判断でも「が」主語は「可能性」より狭い作用域しか取らないが，この場合，「すべてのコインが」の後に休止は存在しない。

以上の観察は，作用域解釈を最大の根拠とする，名詞認可仮説の基盤が脆弱であることを示している。「が」主語・「の」主語を巡る作用域の問題は，名詞認可仮説が依って立つ，双方の主語の位置の違いに起因するものではなく，「が」主語・「の」主語とも，休止の有無に準拠して，（9）で示す二カ所の生起位置があり得るのである。

（9）…［｛ガ主語 / ノ主語｝，…［｛ガ主語 / ノ主語｝…

ここにおける「上の位置」と「下の位置」については第 5 節で明示化する。また，休止が日本語文法の中でどのような働きをしているのかも，そこで明確にすることにしたい。

4. 連体形による認可

伝統的な日本語研究では，連体修飾節（名詞修飾節）においてガ・ノ可変が起こるというのが定説であった。前節で見た名詞認可仮説は，その生成文法版と言ってもよいだろう。しかし，Watanabe（1996）は，名詞主要部が存在しない比較削除構文でもガ･ノ可変が起こることを指摘した。

（10）a. ジョンは［メアリ ｛が / の｝ 読んだ］より（も）たくさんの本を読んだ。

b. ジョンは［メアリ ｛が / の｝ 働いた］より（も）一生懸命働いた。

（Watanabe 1996: 394，「も」は筆者が入れた）

比較を表す「より」に導かれる従属節（（10）での［　］部分）は名詞修飾節とは言えないだろう。

この渡辺の観察は，Hiraiwa（2001, 2005）に引き継がれ，名詞修飾節以外でガ・ノ可変が起こる例が続々と発見されることになる。このことは三原・平岩（2006 第 12 章，執筆担当は平岩）でも詳述したので，本稿では文例を少し挙げるに留める。（11）の例がいずれも名詞修飾節でないことに注目して欲しい（従属節を導く要素を下線で示す）。

（11）a. 太郎は［雨 ｛が / の｝ 止む］<u>まで</u>オフィスにいた。

b.［君 ｛が / の｝ 好きな］<u>だけ</u>食べていいよ。

c.［先週一回電話 ｛が / の｝ あった］<u>きり</u>，花子から何も連絡がない。

d. この辺りは［日 ｛が / の｝ 暮れる］<u>につれて</u>，急に冷え込んでくる。

（三原・平岩 2006: 319-320）

現代日本語では，動詞の終止形と連体形は，同じ形を取るので形態上区別ができないが，（11b）での「好きな」がナ形容詞の連体形であることに注意されたい。とすれば，平行的に，

（11a,c,d）での動詞も連体形であるとしてよいであろう。理論的分析の詳細は割愛するが，上記のような観察から平岩は，「の」主語を認可するのは連体形であるという結論を導くのである。これを「連体形認可仮説」と呼んでおこう。ガ・ノ可変は名詞修飾節で起こるという伝統的見解は，述語が連体形となる節タイプの「一部」（すなわち，関係節と同格節）だけを見ていたことになる。[3]

5. 提示機能から見えるもの

筆者の基本的な立場は連体形認可仮説の流れの中にある。先行研究で指摘された言語事実の中には，連体形認可仮説と齟齬をきたす可能性のある現象もあるが，細部については，今後の研究により調整可能な範囲であろうと期待して先に進みたい。[4]

まず，作用域解釈については，「が」主語と「の」主語が，上の位置あるいは下の位置のいずれかに基底生成されるとすることで自然に説明される。（6）の例を，必要な休止を付けた上で（12）として再掲する。これらは，筆者の判断ではすべて文法的であるばかりでなく，（12a-d）の例に曖昧性はなく，文末に記した作用域関係でそれぞれ一義的に解釈される。

（12）a. すべてのコインが，表になる可能性は 50% だ。　（すべて＞可能性）
　　b. すべてのコインが表になる可能性はおよそ 3% だ。（可能性＞すべて）
　　c. すべてのコインの，表になる可能性は 50% だ。　（すべて＞可能性）

---

[3] Maki and Uchibori（2008: 203）は，平岩の指摘した例には音形のない名詞主要部があり，これらは，(i) の下線部分のように，言語化することもできるとしている。

（i）a. ジョンは［メアリ　{が / の}　読んだ　{程度 / の}］よりたくさんの本を読んだ。
　　b. ジョンは［雨　{が / の}　止む　{時 / 時間}］までオフィスにいた。
　　c. この辺りは［日　{が / の}　暮れるの］につれて冷えこんでくる。

直観的にはよく分かる議論なのだが，名詞主要部が設定できない例は依然として残る。例えば（ii）では，「時」や「の」などを挿入することはできないだろう。

（ii）*［先週一回電話　{が / の}　あった　{時 / の}］きり，花子から何も連絡がない。

ただ，査読者から指摘いただいたことだが，「きり」は，「きりがない」のように格助詞「が」が付いて主語になり得るので，「きり」自体が名詞性を持つ可能性はあるかもしれない。

[4] 例えば，「のだ」「ものだ」「はずだ」などが関わる構文では，述語が連体形を取るが，ガ・ノ可変が起きない（cf. 大島 2010, Kishimoto 2017）。（ia-c）で述語が連体形（「な」語尾）を取ることを，（iia-c）でガ･ノ可変が起きないことを確認されたい。

（i）a. あいつは実は傲慢なのだ。
　　b. 城下町はたいてい静かなものだ 。
　　c. ワシントンは安全なはずだ。

（ii）a. 親　{が /* の}　突然来たのだ。
　　b. 普通，助教　{が /* の}　申し出るものだ。
　　c. 加藤　{が /* の}　ここに来たはずだ。

しかし，「のだ」「ものだ」「はずだ」などの形式は，確かに，元々は名詞的性格を持つ「の」「もの」「はず」によって名詞化された従属節に，コピュラの「だ」が付いたものであろうが，現代日本語では，モダリティ要素の「のだ」「ものだ」「はずだ」として文法化されていると見るのが妥当だろう。つまり，これらの形式を含む節は従属節ではないので，ガ・ノ可変が起こらないのである。もっとも，ガ・ノ可変がなぜ従属節に限定されるのかについては，今後解決されるべき大問題である（三原・平岩 2006: 329-334 に現段階で示し得る説明がある）。

d. すべてのコインの表になる可能性はおよそ 3% だ。（可能性＞すべて）

このことはまた，「が」主語と「の」主語を，句構造における位置関係で区別して扱う必要がないことを示唆する。

（13）で両主語の位置関係を確認しておこう。主語が上の位置にある場合，下位の S 中には，主語と同一指示になるゼロ代名詞があると考えられる。上の位置にある「が / の」主語が「可能性」より上位にあることに注意されたい。

（13）… [$_{\alpha}$ {ガ主語 / ノ主語}，[$_{NP}$ [$_{S}$ {ガ主語 / ノ主語} …][$_{N}$ 可能性]]] …

↑　　↑

上の位置　　下の位置

上の位置では，「が」「の」の後に義務的な休止が置かれると共に，「が」「の」に前接する名詞句に強勢が置かれることが多い。すなわち，焦点要素が示す特徴を有するということである。なお，「α」の範疇については，本論では「焦点要素を含む範疇」とするに留めるが，註 5 で解決の方向性を探りたい。[5]

しかしながら，Akaso and Haraguchi（2011, 2013）・Miyagawa（2013）は，「の」主語と焦点要素が共起しないとしており，これは上記の考察と矛盾する。（14）は，焦点を表す取り立て詞「だけ」と「の」主語が共起しないことを示す例である（文例は筆者）。

（14）a. 拓也だけ {が / * の} 食べた毒キノコ

b. 美穂だけ {が / * の} 笑ったギャグ

旧情報にならない要素は「の」主語になり難いという遠藤（2014）の指摘も，これと軌を一にする現象かもしれない。旧情報にならない要素（すなわち，新情報を担う要素）は焦点解釈され易いからである。（15a）での「見知らぬ人」や，（15b）での「人」はいずれも不定名詞なので，旧情報としての資格を有していない。

（15）a. 見知らぬ人 {が / ? の} やってきた時間

b. 人 {が / ? の} ちらほら来た頃

（遠藤 2014: 55，「?」の判断も遠藤による）

しかし，「の」句と焦点解釈が両立しないという結論を得るには，今しばしの慎重な検討が必

---

[5] Rizzi（1997）によって開発されたカートグラフィ（Cartography）理論は，元々は CP 層（CP-layer）の精密化を目指したものであったが，昨今，vP 層も細分化していこうとする試みがなされている（Belletti 2004, Maeda 2014）。CP と vP が機能範疇であることを勘案すれば，同じく機能範疇である DP 層も細分化できる可能性が浮上する。DP 層には，おそらく文タイプを決める ForceP や，テンスの定形性に関わる FinP は存在しないだろうが，少なくとも，名詞句の定性を決める Def（inite）P や FocP は存在する可能性が高いと思われる。DP を細分化した構造は（i）のようになるだろう。

（i）[$_{DefP}$ … [$_{FocP}$ …. [$_{NP}$ … N] Foc] Def]

休止が生じる環境において，上の位置にある焦点要素を含む構造は次のようになる（「X」は焦点要素）。

（ii）… [$_{DefP}$ [$_{FocP}$ X_i，[$_{NP}$ [$_{S}$ … pro_i …] N] Foc] Def] …

もし，この概念化が正しければ，本論中の「α」は FocP であることになる。この可能性は今後慎重に精査する必要がある。

要であるように思われる。例えば，ガ･ノ可変は主格目的語にも適用されるのだが，Akaso and Haraguchi（2013）・Miyagawa（2013）では，「の」目的語が「だけ」と共起するという指摘もなされている（文例は筆者）。

（16）a. 窓から建物の壁だけ｛が / の｝見える病室で８年も過ごした。

b. 鯛焼きの皮だけ｛が / の｝好きな人ってヘンじゃない？

さらに，非対格動詞でもこの制約が回避される。

（17）a. 想い出だけ｛が / の｝<u>通り過ぎる</u>町

b. 木製のベンチだけ｛が / の｝ぽつんと<u>ある</u>公園

Akaso and Haraguchi（2011: 96）が，焦点として機能する対照の「は」句を含むので非文だとしている「首相の選挙では述べた公約」の例も，「首相の」の後に休止を置けば，筆者には十分に容認可能である。

ここまでの議論を総合すると，「の」主語と焦点要素の絡みについては，データ整備を含め，さらなる研究が必要なように思える。ただ，「だけ」が統語構造中に存する，形態を伴う焦点要素であるのに対して，休止や強勢による焦点解釈は音声形式（PF）における現象であり，統語構造中には存在しないので，統語的焦点と音声的焦点は特質が異なるとする可能性もあり得るように思う。

休止の問題は，介在効果（Harada 1971，井上 1976），及び，他動性制約（Watanabe 1996）にも影響を及ぼすと思われる（(18a,b）は，井上の例に筆者が休止を加えた）。

（18）a. 彼ら｛が / の｝，デモをしているそばへ鉄パイプが落ちてきた。

b. 泥棒｛が / の｝，戸をこじあける音に目がさめた。

（井上 1976: 231，一部修正）

上例は，「デモを」「戸を」という目的語を含むので，目的語が存在するとき「の」主語が許容されないという他動性制約によって，「の」主語が排除される筈である。しかしここで，「が」の場合は休止の有無に関わりなく文法的だが，「の」の場合でも，休止を置くと筆者には完全に容認可能である。つまり，休止によって介在効果・他動性制約が緩和されているということになるが，これは次の構造から説明できる。

（19）… $[_{\alpha}$ 彼ら $_{i}$ の，$[_{S}$ pro$_{i}$ デモを …

S 中に「の」主語そのものは存在せず，それと同一指示となるゼロ代名詞（pro）があるが，pro 自体は「の」格句である必然性はないので，「の」主語に課される他動性制約を回避しているいうことになる。

さて，ここまで論じてくると，（20）における二つの構造は，別の構文として捉える方が自然であるという道筋が見えてくる。

（20）a. 休止ありの場合：… $[_{\alpha}$ ｛ガ主語 / ノ主語｝$_{i}$，$[_{S}$ pro$_{i}$ …

b. 休止なしの場合：… $[_{S}$ ｛ガ主語 / ノ主語｝…

（20a）で上の位置にある「が」主語と「の」主語は，焦点解釈となる「提示句」として機能し

ていると言えよう。焦点解釈となる「が」句とは，すなわち総記の意味を持つ句ということである。とすれば,「の」句についても総記性を確認する必要が生じる。以下，このことを論じておきたい。

久野（1973）は，著作の第 2 章で，中立叙述・総記の「が」の区別は従属節中では中和され，一律に中立叙述の「が」として解釈されると述べている。中立叙述解釈とは,「あ，バスが来た」のように，全体が新情報となる解釈である。他方，総記解釈とは,「来たのは（タクシーではなく）バスだ」のように，述語「来た」を主題とし，主語「バス」を焦点とする解釈である。その結果,「X がそして X だけが」という解釈になる。さて,（21）を見られたい（文例は筆者）。

（21）a.［博人がスワヒリ語を話せること］知ってた？

b.［ユーミンが天才だということ］は音楽ファンはみんな知っている。

（21a,b）での従属節述語は恒常的状態を表すものだが,「博人だけがスワヒリ語を話せる」「ユーミンだけが天才だ」という総記の意味が欠如している。しかしながら,「博人が」「ユーミンが」の後に十分な休止を置いて読むと，これらの総記解釈がかなり復活するのを感じるだろう。もし，上で述べた久野の観察が正しいとすると，休止付きの「博人が」「ユーミンが」は従属節要素ではないと考える必要がある。この場合の構造は（22）のようになっているのだろう。つまり,「博人が」「ユーミンが」自体は，上の位置にあるということである。

（22）a. 博人$_i$が，［pro$_i$スワヒリ語を話せること］知ってた？

b. ユーミン$_i$が，［pro$_i$天才であること］は音楽ファンはみんな知っている。

そして重要なことに，ガ･ノ可変が適用される環境において,「が」主語のみならず「の」主語でも，休止を置くと総記解釈が可能になるのである。（23a）が中立叙述解釈，（23b）が総記解釈の例である。

（23）a. 今年の盆踊り｛が / の｝開催される可能性は … 現状では危ういなぁ。

b. 今年の盆踊り｛が / の｝，開催される可能性は … 現状では危ういなぁ。

開催が危ぶまれる催しは盆踊り以外にもあるのだろうが，（23b）では，話し手は今年の盆踊り「だけ」を問題にしているという解釈が優勢である。[6]

この観察が妥当なものであるとすれば,「が」のみならず,「の」にも総記解釈があり得るということになる。そして，総記解釈となる休止付きの「NP｛が / の｝」は，焦点機能を担う要素として，後続文命題に先立って提示されているとしてよいであろう。（23a,b）の該当する部分の構造を示しておこう。

---

[6] 査読者から，（23）での「今年の」という限定的な表現は総記解釈を強化するので,「子供たちが楽しみにしている」といった表現で検証する方がよいという指摘を受けた。この表現を用いて検証したのが（i）の例である。表現が長くなるので論点が幾分か陰る恐れもあるが，本論での議論は依然として有効であるとしてよいであろう。

（i） a. 子供たちが楽しみにしている，盆踊り｛が / の｝開催される可能性は … 現状では危ういなぁ。

b. 子供たちが楽しみにしている，盆踊り｛が / の｝，開催される可能性は … 現状では危ういなぁ。

（24）a.［今年の盆踊り　{が / の}　開催される］可能性

b.　今年の盆踊り$_i$　{が / の}，［pro$_i$ 開催される］可能性

（24b）は，「今年の盆踊りについて言えば，それ（pro）が開催される可能性（は，現状では危うい）」という，「提示機能（presentative function）」を基盤とした述べ立てであると言えよう。[7]

日本語は，主題卓立型（topic-prominent）言語（Li and Thompson 1976）として主題の「は」を多用するが，主題は提示機能を担う代表的な文法形式である。そして日本語では，主題の「は」以外にも，提示機能を基盤として成立する構文が多い。例えば，（25）は多重主格構文と呼ばれる構文だが，概ね，「佐藤君について言えば，このクラスでいちばん頭がいい」「豊ノ海について言えば，関取の中で最も腰が強い」という意味を表している。

（25）a.　佐藤君が，このクラスでいちばん頭がいい。

b.　豊ノ海が，関取の中で最も腰が強い。

この「X について言えば」という提示の仕方は Aboutness 機能と呼ばれるが，Aboutness 機能は，提示機能の最も根源的な現れである。まず，「佐藤君」「豊ノ海」を文命題に先立って提示し，それについて述べる部分を後に続けるという訳である。上の位置に生じる「が」句・「の」句も，この提示機能を基盤として成立していると言えよう。その音声上での現れが「休止」であり，表記上での現れがコンマ「，」だということである。

（26）の所有者上昇構文も，日本語の提示機能を利用して成立する構文である。「花子の右足」「花子の頭」から，「右足」「頭」の所有者である「花子」を取り出しているように見えるので，所有者上昇（possessor-raising）構文と呼ばれる。

（26）a.　太郎は花子を，右足を蹴った。

b.　太郎は花子を，頭を叩いた。

日本語には，一文中に2つの「を」格句が生起することを禁じる二重対格制約があるので，（26a,b）を嫌う話者も多いが，そのような話者でも，（27a,b）のように，取り立て詞によって1つの「を」を隠すと容認するようになるだろう。ちなみに，「花子を」の後に休止を置くと，筆者には（26a,b）のままでも完全に容認可能である。

（27）a.　太郎は花子を，右足だけ蹴った。

b.　太郎は花子を，頭も叩いた。

（26）（27）では，まず「花子を」という「全体」を提示し，その後で「右足」「頭」という「部

---

[7]　総記の「の」を認めようとする論考は他にもある。新国（他）（2017）では，（i）での「の」が総記解釈しか許さないとして，総記性を，「が」から（ガ・ノ可変における）「の」にも拡張可能であることが示唆されている（文例は福井（編）2000: 79 による）。

（i）父親の大音楽家であった物理学者

（i）を「が」格主語に置き換えた，「父親が大音楽家であった物理学者」での述部が恒常的状態を表し，「父親が」が総記解釈になるが，「が / の」双方において，祖父や母親ではなく，父親が大音楽家であったという意味が表明されていることを確認されたい。

分」について述べるのである。[8]

このように，日本語には提示機能を利用した構文が非常に多いのだが，もう１つだけ見ておくことにしよう。(28) は認識動詞構文の例である。

(28) a. 私は隣人の親切をありがたく感じた。

b. ヒロシはサチの言動を不審に思った。

この構文は，まず「隣人の親切」「サチの言動」を提示し，その後の部分でそれについて叙述する (29) のような構造をなす。概ね，「隣人の親切について言えば，それ (pro) がありがたく感じた」といった意味構造を表している。

(29) 私は［隣人の親切$_i$を［pro$_i$ありがたく］］感じた。

ここで，「を」句が提示句として機能していることは，「を」句と後続文命題の語順を入れ替えられないことからも分かる。

(30) a. * 私はありがたく隣人の親切を感じた。

b. * ヒロシは不審にサチの言動を思った。

「を」句を先に示さないと提示句の機能を果たし得ないのである。

このような語順の制限は，多重主格構文や所有者上昇構文にも見られる。前者については，1つ目と２つ目の「が」句を入れ替えた (31a)，後者については，所有者を後に配置した (31b) が完全に非文となることを確認されたい。

(31) a. * 腰が，関取の中で豊ノ海が最も強い。

b. * 右足だけ，太郎は花子を蹴った。

「豊ノ海が」「花子を」が提示句であるとすれば，当然の結果であろう。

6. 結語にかえて

このように考えてくると，「が」主語と「の」主語をガ･ノ可変という「交替現象」として捉えてよいのかという疑念が生じる。本稿では，そのことを結論的に述べるのは差し控えたいが，最後に，そのことを示唆する方言の事実を少しだけ見ておこう。

九州の方言の幾つか（佐賀，熊本，長崎，福岡の一部）では，共通語では無理なタイプの従属節ばかりでなく，(32) のように，独立文でもガ・ノ可変が起こることはよく知られている。

(32) バス｛が / の｝来た。

---

[8] 取り立て詞の他に，例えば，副詞句の介在によっても二重対格制約が緩和される（査読者の指摘による。(i) の文例も査読者によるが，コンマは筆者が加えた)。

(i) a.?? 何を，変な歌を歌っているの？

b. 何を，いつまでも，変な歌を歌っているの？

この救済策を所有者上昇構文に適用してみると，２つの「を」格句の生起を嫌う話者でも，容認性の向上が感じられることと思われる。

(ii) 太郎は花子を，大勢の人がいる前で，思いきり腹を蹴った。

ただ,「が」は総記解釈に,「の」は中立叙述解釈に偏する傾向があるようだ。さらに，越智（2016: 169，脚注 23）の情報によれば，秋山・吉岡（1991）が，古典語の場合と同様，熊本方言においても「の」格は尊敬視する主語に,「が」格は卑賤視する（やや見下げる）主語に付けるという,「使い分け」があることを報告しているという。とすると,「が」と「の」では文の意味が異なることになる。九州方言における「が」主語と「の」主語を，ガ・ノ可変という交替規則で関連付けることに対して躊躇いを覚えざるを得ない。

1970 年代までの古典的生成文法では，意味的に関連する二つの文を変形規則で関連付けてきた経緯がある。例えば，受動変形によって能動文と受動文を関連付け，与格移動変形によって John gave a book to Mary と John gave Mary a book を関連付けるといった具合である。しかし，これらの規則で関連付けられる二つの文は，厳密に言えば意味が異なる。意味の異なりの範囲がどこまでであれば規則によって関連付け, どれだけ異なれば別構文とするかは, 案外やっかいな問題である。ガ・ノ可変はそれを見極める試金石であるようにも思う。

参考文献

Akaso, Naoyuki and Tomoko Haraguchi（2011）On the Categorial Status of Japanese Relative Clauses. *English Linguistics* 28（1）.

Akaso, Naoyuki and Tomoko Haraguchi（2013）On the Agent / Theme Asymmetry in Japanese Nominative-Genitive Conversion. *WAFL* 8.

秋山正次・吉岡恭夫（1991）『暮らしに生きる熊本の方言』熊本日日新聞社 .

Belletti, Adriana (2004) Aspects of the Low IP Area. In L. Rizzi (ed.) *The Structure of CP and IP*. Oxford University Press.

遠藤喜雄（2014）『日本語カートグラフィー序説』ひつじ書房 .

Harada, Shin-Ichi（1971）Ga-No Conversion and Idiolectal Variations in Japanese. *Gengo Kenkyu* 60.［福井直樹（編）（2000）『シンタクスと意味：原田信一言語学論文選集』大修館書店に再録］

Hiraiwa, Ken（2001）On Nominative-Genitive Conversion. *MIT Working Papers in Linguistics 39*.

Hiraiwa, Ken（2005）*Dimensions of Symmetry in Syntax: Agreement and Clausal Architecture*. Doctoral Dissertation. MIT.

井上和子（1976）『変形文法と日本語（上)』大修館書店 .

Kishimoto, Hideki (2017) Remarks on Nominative-Genitive Conversion in Japanese. *Nanzan Linguistics* 12.

久野暲（1973）『日本文法研究』大修館書店 .

Li, Charles N. and Sandra A. Thompson（1976）Subject and Topic: A New Typology of Language. In C. N. Li（ed.）*Subject and Topic*. Academic Press.

Maeda, Masako（2014）*Derivational Feature-based Relativized Minimality*. Kyusyu University Press.

Maki, Hideki and Asako Uchibori（2008）*GA / NO* Conversion. In S. Miyagawa and M. Saito（eds.）*The Oxford Handbook of Japanese Linguistics*. Oxford University Press.

三原健一・平岩健（2006）『新日本語の統語構造』松柏社 .

三上章（1953）『現代語法序説』刀江書院 .

Miyagawa, Shigeru (1993) Case-checking and Minimal Link Condition. *MIT Working Papers in Linguistics* 19.

Miyagawa, Shigeru（2013）Strong Uniformity and *Ga* / *No* Conversion. *English Linguistics* 30（1）.

Nakai, Satoru（1980）A Reconsideration of Ga-No Conversion in Japanese. *Papers in Linguistics* 13（2）.

新国佳祐・和田裕一・小川芳樹（2017）「容認性の世代間差が示す言語変化の様相：主格属格交替の場合」『認知科学』24（3）.

Ochi, Masao（2001）Move F and *Ga* / *No* Conversion in Japanese. *Journal of East Asian Linguistics* 10（3）.

越智正男（2016）「名詞修飾節における格の交替現象」村杉恵子・斎藤衛・宮本陽一・瀧田健介（編）『日本語文法ハンドブック』開拓社 .

大島資生（2010）『日本語連体修飾節構造の研究』ひつじ書房 .

Rizzi, Luigi (1997) The Fine Structure of the Left Periphery. In L. Haegeman (ed.) *Elements of Grammar*. Kluwer.

Watanabe, Akira（1996）Nominative-Genitive Conversion and Agreement in Japanese: A Cross-linguistic Perspective. *Journal of East Asian Linguistics* 5（4）.